大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

早く来過ぎた人ルードヴィII世とワーグナー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010015

早く来過ぎた人ルートヴィヒⅡ世とワーグナー

伊藤嘉啓

（1） ホーエンシュヴァンガウ城での幼年時代

南ドイツのバイエルン国の3代目の王であるルートヴィヒⅡ世（1845—86）は，何よりもまづ，ワーグナーの庇護者として，後世にしられてゐる．

ルートヴィヒが，ワーグナーの名まへをはじめて知つたのは，養育係の女性が，見てきた『ローエングリーン』について話して聞かした時だつたと云はれる．これは1858年，ミュンヘンでの『ローエングリーン』初演の時の話で，ルートヴィヒは13歳であつた．ルートヴィヒが，『ローエングリーン』に興味をもつたのは，それが白鳥の騎士の伝説のオペラだつたからであらう．

白鳥は，幼いルートヴィヒにとつて，特別の意味をもつてゐる．バイエルン王国の首府は，ミュンヘンであるが，ルートヴィヒは，少年時代の大部分を，オーストリアとの国境に近い，アルプス中腹にあるホーエンシュヴァンガウ城で過ごした．もともとこゝには，12世紀ごろから，シュヴァンガウ一族の城砦があつたのであるが，その後長い間にすつかり廃墟となつてゐたのを，ルートヴィヒの父のマクシミリアンが，眺めがよかつたゝめにこれを買い取り，1832～36年にかけて，新に建て直したのが，ホーエンシュヴァンガウである．

シュヴァンガウ（Schwangau<Schwan＋Gau）は，「白鳥の郷」といふ

意味になるが，おそらくは，そのためでもあらう，この城は白鳥と深く結びついてをり，白鳥の騎士ローエングリーンの城は，こゝであつたなどといふ伝説もある．それにまた，ルートヴィヒの母マリーが，大の白鳥好きで，庭の池には，沢山の白鳥が群れ泳いでゐた．

ホーエンシュヴァンガウでは，外に白鳥がゐるだけでなく，室内の装飾品にも，白鳥のものが多かつたし，食堂の間には，ローエングリーンの話が壁画にゑがかれてゐた．少年時代のルートヴィヒにとつて，最も身近かで，最も美しい生き物は，白鳥であり，白鳥への愛は，終生，変らなかつた．

ホーエンシュヴァンガウ城が，幼いルートヴィヒに与へた影響は，白鳥のほかに，もう一つあつたと思はれる．この城は，父の建てた新しい城ではあつたが，ロマンチックな空想をそゝる騎士時代の城址である．生来，人見知りがはげしく，内向的で，シラーやシェークスピアを愛読する少年は，このやうな城に住んで，ますます騎士物語の世界へとのめり込んで行く．

（2） はじめてのオペラ観賞

1861年2月2日，15歳のルートヴィヒは，父の許しを得て，生まれてはじめて，オペラを見に行つてゐる．それは，『ローエングリーン』であつた．同行したお付きの者[1]の回想によれば，「王子は，上演中，感激の涙を流してゐた」といふ．ルートヴィヒに『ローエングリーン』を見たいと思ひ立たせた動機には，白鳥の騎士のオペラといふことのほかに，『未来の芸術作品』の著者のオペラといふことも大きく作用してゐたであらう．これより少しまへ，親戚のマクシミリアン公，この人は，のちにルートヴィヒが婚約するゾフィーの父親であるが，そのマックス公爵の邸で，偶然ピアノの上においてあつた『未来の芸術作品』が目にとまり，「未来」といふ言葉にひかれて，ルートヴィヒはこの本に興味をもつてゐたからである．

『ローエングリーン』を見て感激したルートヴィヒは，その台本を繰り返し繰り返しすつかり暗誦するまで読み，ワーグナーのほかのオペラの台本

も，そして，芸術論である『未来の芸術作品』は，特に熱心に，読んだ．

しかし，これだけでは満足出来なかつたらしい．6月16日には，父におねだりして，自分1人のためだけに，『ローエングリーン』をもう1度，特別上演して貰つてゐるし，さらに，12月，今度は『タンホイザー』を見に行つてゐる．『タンホイザー』公演の時の様子を，同行した官房事務官ラインフェルダー（Franz von Leinfelder）は，

> 例へば，タンホイザーが再びヴェーヌス山へ行くところで（ヴェーヌスは幕開きの折りにも登場しますが），王子の体は，今度も明らかに痙攣状態でありました．それは，劇しいものでしたので，私は癲癇の発作ではないかと心配しました．

と，伝へてゐる．

ルートヴィヒは非常に内気な子供で，周囲の誰とも，あまりうちとけなかつたのであるが，13歳まで養育係をしたジビュレ・マイルハウス（Sibylle Meilhaus），『ローエングリーン』についてルートヴィヒにはじめて話して聞かしたあの女性であるが，彼女にだけは親しみ，養育係をやめて，レオンロート男爵夫人（Freifrau von Leonrod）となつてからも，ルートヴィヒはこまごました日常のことやその折々の感想をジビュレに書き送つてゐる．1863年2月には，後任の養育係ラ・ロゼー伯爵（La Rosée）から，ワーグナーの『オペラとドラマ』をもらつたと云ひ，6月24日には，最近出たばかりのワーグナーの3部作『ニーベルングの指環』を手に入れたし，『トリスタンとイゾルデ』も持つてゐると伝へてゐる．

『指環』の台本は，53年に私家版として印刷されてゐたのであるが，それから10年後の63年，ワーグナーはこれに序文をつけて公刊した．ルートヴィヒが入手したのは，この版である．そこで，ワーグナーは，この舞台祝祭劇（Bühnenfestspiel）の上演といふ不可能事を敢へて可能とするやうな「そのやうな王侯は現れないのであらうか？」と云ひ，「はじめに行為があつた」

と『ファウスト』の一行を引用して，その文をしめくゝつた．この一言がルートヴィヒを動かし，後のワーグナー援助となるのである．

1ケ月後の7月23日のレオンロート夫人への手紙では，「ワーグナーの3部作『ニーベルングの指環』はとても素晴らしいです．今日中に，読み了へるでせう」と，その読後感を書いてゐる．『指環』は，序夜つき3部作で，4つの作品から成り立つてをり，かなり長いものであるから，通読するのに，約1ケ月かゝつたのかもしれない．

このやうな手紙を書いてから，8ケ月後，国王マクシミリアンⅡ世の死去，さうして，ルートヴィヒの即位とつゞくのである．新王は，18歳であつた．18歳といふのは，若過ぎるのか，どうか．清朝最後の皇帝溥儀は2歳で即位したが，2歳ならば，「皇帝」の地位といふものを全く理解出来ず，却つて楽でもあつたらうが，多感な18歳の青年にとつては有能であればあるだけ，「君たるは難(かた)」かつたかもしれない．

（3） ワーグナー探索

1864年3月，ルートヴィヒⅡ世が，父マクシミリアンⅡ世の後をおそつて，王位についた，丁ど，そのころ，ウィーンでは77回も練習を重ねた『トリスタン』が，最終的に上演とりやめと決定した．

ワーグナーは前年63年の2月から4月にかけて，ペテルスブルク，モスクワに演奏旅行し，総額7000ターラーの収入を得てゐる．そのうちから，緊急の支払ひと別居中の妻ミンナへの仕送りを除いて，4000ターラーが，ワーグナーの懐に残つた．ワーグナーはこの金で，しばらくウィーンに落ち着かうとした．63年5月，ワーグナーは，ウィーン郊外ペンツィングのウィーン通り221番地に，豪壮な別荘の2階部分を借りた．家賃は年1200グルデン．しかし，それから10ケ月後，ワーグナーは，「浪費」のために，多額の借金を抱へ，それに追ひ討ちをかけるやうに，『トリスタン』の上演中止まで決つたので，家財のうち，売れるものは売払ひ，夜逃げするやうにして，64年3

月23日，ウィーンを去つた．

ミュンヘンに行くと，10日に即位したばかりのルートヴィヒII世の肖像画が，ショーウィンドーにかけてあつた．それを見てワーグナーは感動した．それは，「殊のほか困難であらう境遇にありながら，美貌と若さが与へる感動」(『わが生涯』Gregor-Dellin 編 S. 751) であつた．この時，ワーグナーは八方ふさがりであり，ホテルへ戻る道々，自嘲の墓誌銘を考へて，気をまぎらしてゐる．

Hier liegt Wagner, der nichts geworden,
nicht einmal Ritter vom lumpigsten Orden;
nicht einen Hund hinter'm Ofen entlockt' er,
Universitäten nicht 'mal 'nen Doktor.

3月24日，ワーグナーはミュンヘンからスイスのマリアフェルトにゐるフランソワ・ヴィレ (François Wille, 1811—96) に宛て，「2，3日お邪魔いたしたく，よろしくお願ひ申上げます．明後日土曜日，夕方4時にチューリヒ駅に到着いたしますので，小生の鞄をすぐにマリアフェルトへ運んで貰ふやうに，車を1台，用意して頂ければ幸甚です」と手紙をだした．この文面，読みやうによつては，ワーグナーの厚かましさを表してゐるかもしれない．

夫のフランソワは，コンスタンチノープルへ旅行中であつたが，ヴィレ夫人がワーグナーを迎へて，離れをワーグナーのために空けてくれた．ワーグナーは，閑つぶしに，ジャン・パウルの『貧民の弁護士ジーベンケース』(*Der Armenadvokat Siebenkäs*)，ジョルジュ・サンドやウォルター・スコットの小説などを読んでゐる．

まもなく，ヴィレ氏も旅行から戻つてきたが，ワーグナーはこゝでも歓迎されざる客であることを悟つて，約1ケ月の滞在のゝち，4月28日，シュトゥットガルトへ向けて出発した．シュトゥットガルトでは，そこの宮廷劇場の指揮者をしているエッケルト (Karl Eckert, 1820-79) をたづねたり，

これからのことを相談しようと，ビーブリヒ時代からの友人で指揮者のヴァイスハイマー（Wendelin Weißheimer, 1838-1910）を，電報で呼び寄せたりした．30日，ホテルに来たヴァイスハイマーに，ワーグナーは云つた，「僕は，もう駄目だ．」翌日，ワーグナーはシュトゥットガルトを発つ積りだつたが，その日，モーツァルトの『ドン・ジョバンニ』があると聞いて，それを見てからにしようと思つて，出発を延ばすことにした．

出発を明日にひかへた5月2日，ワーグナーがエッケルトの家で雑談してゐると，「バイエルン国の秘書」なる者がたづねて来た．ワーグナーは自分はこゝにゐない，と云つて，このお客を追返へしてもらつたが，心配になり，急いでホテルにとつてかへすと，このミュンヘンの男は，ホテルにも訪ねて来たことが分つた．ワーグナーは，不安な夜を過ごす．翌5月3日，午前10時，バイエルン国官房書記官プフィスターマイスター（Franz Seraph von Pfistermeister, 1820-1912）は，再びやつて来て，ワーグナーに，うやうやしく王の親書と，それにそへて指環と王の肖像画とを，手渡した．

即位したルートヴィヒII世の最初の「仕事」は，ワーグナーを呼寄せることであつた．しかし，ワーグナーは，どこにゐるか分らない．官房書記官プフィスターマイスターが，ワーグナー探索を命ぜられた．プフィスターマイスターは，まづ，ウィーンに行つて，ペンツィングにあるワーグナーが借りてゐたヴィラを探しあてたが，ワーグナーは，すでに逃亡したあとで，留守番の老夫婦は，ワーグナーの行先にかたく口をとざした．あることから，スイスのマリアフェルトに行つたと聞き，ヴィレ家をおとづれたが，こゝもワーグナーは去つてゐた．しかし，ヴィレ夫人から，シュトゥットガルトのホテル・マルクゥルト（Marquardt）に泊まつてゐる筈だとをしへられ，そこへ行くと，いま，エッケルトのところに行つてゐて，ゐない，と云はれ，それで，エッケルトの家に廻ると，居留守を使はれてしまひ，次の日，やうやくワーグナーを摑へることが出来たといふわけであつた．

ワーグナーは，この幸運をすぐにエッケルトのところに知らせに行き，ヴァイスハイマー，それに『ローエングリーン』の上演を頼んであつた劇場監

督のガル男爵 (Ferdinand Freiherr von Gall, 1809-72) も加はつて，喜び合つてゐると，そこに，パリにてマイヤーベーア死去，の電報が入つた．かつてワーグナーは，マイヤーベーアにすがつて，何とか世にでたいと思つたのであつたが，たびたびの試みにも何一つ成功せず，そのうちに，マイヤーベーアは，ワーグナーの疫病神のやうになつてしまひ，うまく行かないのは，全てマイヤーベーアのせゐであるかの如く思はれたこともあつた．

ワーグナーは，この日のうちに，王に感謝の手紙を書き，夕方，プフィスターマイスターと一緒に，汽車でミュンヘンへ向つた．

(4) 王の友人

王とワーグナーとの謁見は，翌5月4日に行はれた．ワーグナーはマリアフェルトのエリーザ・ヴィレに手紙でその様子を知らせてゐる．日附は謁見日とおなじ5月4日．「早速この限りない幸運をお知らせしなければ，自分は恩知らずの人間でありませう」と書きはじめる．「王は大へんに美しく，精神ゆたかで，感受性に富み，華麗ですので，残念ながら，この卑俗な世間にあつては，はかない神々の夢のやうに，消えて了ふのではないかと心配です」といふ初対面での印象は，森鷗外が『うたかたの記』で取上げる，20年後の王の死を予見してゐたかのやうにもとれる．そして王と自分との関係について次のやうに述べてゐる．「王は小生のことについて何もかもご存じで，心から小生を理解していらつしやいます．王は，小生がいつまでも側にゐて，仕事をし，休息し，作品を上演することをお望みです．必要なものは何でも下さるさうです．小生はニーベルンゲンを完成させなければなりません．そして，王はそれを，小生の希望する形で，上演したいとの仰せです．小生は何ものにも拘束されない一個の人間であり，お抱への楽長ではなく，王の友人であつてよいとのことであります．」

翌5日には，知合ひのマティルデ・マイヤーにも，ほゞ同じ内容のことを書いてゐる．

王は小生が必要とするもの，生活するためにも，創作するためにも必要とするものを，全て提供して下さいます．小生は，たゞ王の友人であればよいので，雇はれて，何らかの職務につくわけではありません．

この手紙には，ルートヴィヒとワーグナーとの関係が，簡潔ながら，過不足なく現れてゐる．

古来，王侯貴族と芸術家との結びつきは，深い．ドイツ語で芸術保護者を意味する Mäzen といふ言葉は，古代ローマの貴族で，アウグストゥス帝の友人でもあつたメツェーナス（Maecenas）に由来してゐるといふ．メツェーナスが，詩人ホラティウスやヴェルギリウスの庇護者だつたからであり，このやうに，王侯貴族は昔から芸術家を援助してゐる．

音楽家でも，ハイドンはハンガリーのエステルハーツィ侯（Esterházy）に仕へてゐたし，モーツァルトもザルツブルク大司教の宮廷楽団の楽師であつた．このやうな音楽家たちは，抱へ主の要請で演奏し，曲を作るのがおもな仕事であり，そのほかにも各地の王侯貴族や金持からの注文にも応じて生活してゐたのである．つまり，芸術家といふよりは，むしろ職人と呼ぶ方が，より適切かもしれない．

ワーグナーのなかには，多くの現代への芽がふくまれてゐる．その顕著な例の１つは，いふまでもなく，『トリスタン』である．『トリスタン』第１幕の前奏曲が，現代音楽への扉を開いたことは，音楽史の常識である．さうしてまた，芸術家としてのあり方も，ワーグナーのそれは，以前とは違つてゐる．ワーグナーは，ルートヴィヒと会ふまでにも，さまざまの人から援助を受けてゐる．そのうちでも，ヴェーゼンドンク夫妻は，特筆されなければならない．しかし，ワーグナーは，ヴェーゼンドンクからの依頼で，作品を作つてはゐない．提供された家に住み，旅行の費用を出してもらひながら，ワーグナーはひたすら自分の作りたい作品だけをつくりつゞけたのである．職人と現代の自由な芸術家の中間に，ワーグナーは生きてゐた．そのために，ワーグナーは，おそ過ぎた職人，または，早過ぎた現代芸術家と云つて，い

へないこともないであらう．

ルートヴィヒとワーグナーとの関係は，ヴェーゼンドンクのワーグナーとのそれと，基本的には，変らない．エリーザ・ヴィレとマティルデ・マイヤーへの手紙から明らかなやうに，ワーグナーが仕事に打込めるやうに，王は出来るだけの援助を与へる．しかし，ワーグナーは王のお抱へではない．王に雇はれてゐるのではない．あくまでも，王と対等であつて，王の友人なのである．この点を，ワーグナーは，2通の手紙で，繰返し述べてゐる．エリーザ・ヴィレには，自分は，「何ものにも拘束されない一個の人間」であり，「楽長ではない」と云ひ，マティルデ・マイヤーにも，「雇はれて，何かの職務につくのではない」と書き，さらに，どちらにも，自分は「王の友人」であつていゝのだ，と強調してゐる．一般に，ルートヴィヒはワーグナーの庇護者といはれてゐるけれども，ルートヴィヒが抱へ主で，ワーグナーがその職人だつたわけではない．こゝのところに，ルートヴィヒとワーグナーとの関係の特徴がある．

（5） ミュンヘンの日々

謁見から5日後の5月9日，ルートヴィヒはワーグナーに，とりあへず，4000グルデンを与へる．ワーグナーは，10日から12日にかけて，ウィーンへ行き，借金のうち急いで返さねばならない分に，この金を当てる．全額を清算するには，これだけでは，まだまだ足りない．1ケ月後の6月10日，さらに16000グルデンが追加され，これでワーグナーは，やうやくウィーンでの借金の後始末が出来た．このほかにも，ワーグナーは生活費として，年4000グルデンを支給される．

ミュンヘンに来て，ワーグナーはホテル住まひであつたが，ルートヴィヒがシュタルンベルク湖畔のペレット荘をワーグナーのために借りてやつた．ワーグナーは5月14日に入居する．こゝは離宮の1つベルク城にも近く，何かと便利であつた．ルートヴィヒからは，しばしばお呼びがかゝつた．エリ

ーザ・ヴィレへの手紙（5月26日）で，ワーグナーは，「王は今は大抵こゝの小さなお城においでゝす．10分で車は小生をそこへ運びます．それが，日に1，2度あります．さうすると，小生は，まるで恋人のところへ行くやうに，馳せ参じます」と知らせてゐる．しかし，王は即位早々ワーグナーだけにかまけてゐたわけではない．6月18日にはバイエルン領内の北西にある保養地バート・キッシンゲンに出掛けてゐる．そこにはロシア皇帝夫妻，オーストリア皇帝夫妻が逗留してゐたので，表敬のために訪れたのである．

経済的には，大きな援助を受け，王からの迎への使者は度々やつて来たが，ワーグナーは，まはりに友だちがゐないのを淋しく思つた．ワーグナーは，『蝕まれた友情』の主人公のやうに，「掛替へのない友達なしにはゐられない性」なのだ．早くも，6月9日には，ベルリンにゐるハンス・フォン・ビューローへ手紙をだして，家族ぐるみで，招待してゐる．6月29日，この招待に応じて，ビューロー夫人コージマが，3歳半と1年3ケ月の2人のむすめをつれて，ペレット荘にやつて来た．ビューローは都合でおくれ，7月7日にやうやく到着する．この時，コージマは結婚して7年，27歳であり，ワーグナーは51歳である．翌65年4月10日，コージマはワーグナーの子イゾルデを生む．

この間，6月23日には，例のビーブリヒ時代の「友だち」マティルデ・マイヤーに，「こちらに来て，家政をとつてみる気はありませんか？」と打診して見たが，これは，きつぱり断わられた．

8月25日は，ルートヴィヒの誕生日である．ワーグナーはこの日のために，「誕生日の挨拶」(Geburtstagsgruß) と題する曲を作り，ホーエンシュヴァンガウ城で演奏するつもりであつたが，当日，この城で，マリア皇太后が病気であつたゝめに，演奏はとりやめとなり，その後，「忠誠行進曲」(Huldingsmarsch) と改題して，10月5日，ミュンヘンの宮殿において，演奏してゐる．

9月3日，ビューロー夫妻もペレット荘を去り，夏も終つた．いよいよ本格的に仕事をはじめねばならない．ワーグナーは，9月26日，ルートヴィヒ

に宛て，他の仕事は一時ワキにおいて，（長く中断してゐた）『ニーベルングの指環』の作曲に専念する決心をしたこと，それで，この3部作の完成とそのミュンヘンでの上演を，はつきりと自分に命じて欲しい．そのためには，ミュンヘンでの適当な住居とそれなりの費用とを賜りたい旨の手紙を書いてゐる．

10月7日，王，『指環』の完成を公的に命令．

10月18日，王，『指環』の著作権を3万グルデンで取得．

10月26日，王，『指環』上演のための劇場建設を計画．

これらの重要な事柄は，すべてこの9月26日のワーグナーの王への手紙に，その種子が認められる．

10月15日，ワーグナーはミュンヘン市内のブリエンナー通り21番地に引越した．この家は地盤のやはらかい所に立つてゐたゝめ，ゆらゆら揺れ「船」（Schiff）といはれたりしたのださうであるが，こゝをワーグナーはケバケバしく派手に飾りたてた．それが，間もなく，人々のワーグナー非難の理由の1つとなる．

11月20日には，ビューロー夫妻も，ベルリンからミュンヘンに移つて来て，ワーグナーからの「つて」で，ビューローは「御前奏者」（Vorspieler）といふ肩書を許され，のちには「宮廷楽長」（Hofkapellmeister）にまで昇格するが，妻のコージマがワーグナーの子どもを生んだことから，ビューローは女房と交換に出世を手に入れたと噂された．

その年も押つまつた12月4日，ルートヴィヒ臨席のもとに，ワーグナー自身の指揮で，『さまよへるオランダ人』がミュンヘンで初演された．その同じ日，ルートヴィヒはプフォルテン（Ludwig Freiherr von der Pfordten, 1811-80）を首相に任命してゐる．この男爵は，バイエルン出身の人であるが，あの49年のドレスデン暴動のとき，ザクセン王国の文化大臣であり，バリケード破りの男ワーグナーをしつかりと記憶してゐた．1年後，この総理大臣プフォルテンと，あのシュトゥットガルトのホテルに使者としてたづねてきた官房書記官プフィスターマイスターの2人によつて，ワーグナーはミ

ュンヘンを追はれることになるが，この時はまだ，ワーグナーの立場にかげりは見えない．

ルートヴィヒは，11月26日のワーグナーへの手紙で，「私は『ニーベルングの指環』の上演が完全なものになるやうに，石づくりの劇場をつくる決心をしました．この比類なき作品を表現するためには，それにふさはしい空間が必要です」と書いたが，ワーグナーは，この劇場の設計者に建築家のゼンパー（Gottfried Semper, 1803-79）を推薦した．ワーグナーとゼンパーとは，ワーグナーがドレスデンで楽長をしてゐた時からの知合ひである．ゼンパーもワーグナーと同様，49年5月のドレスデン蜂起に加はり，あのバリケードを作つたのは，ほかならぬゼンパーであつた，革命失敗後，ゼンパーはロンドンを経てパリへ逃げ，53年以来，チューリヒ大学の教授をしてゐた．プフォルテンにすれば，ドレスデン暴動の折りの革命屋の生き残りが，2人までも，いまバイエルンの宮廷にあらはれて，王にとり入つてゐることになる．12月29日，ゼンパーは王に拝謁して，正式に劇場設計の依頼を受けた．

（6） 打込まれた楔

あけて1865年，この年はワーグナーにとつて受難の年となる．2月，ゼンパー設計による祝祭劇場の案が公表された．67年夏の完成予定で，それに必要な経費は，約500万グルデン．あまりの高額のために，人々は驚倒した．

この頃からワーグナーに対する反撥が表面化してくる．反ワーグナーの気運は，まづ，宮廷内に，そして民衆の間にまで広まつて行つた．2月6日，ワーグナーはルートヴィヒのもとに伺候したが，王の不興のゆゑに面会を拒絶される．理由は，ワーグナーが，事務官のまへで，王のことを「坊や」（mein Junge）と云つたゝめといふのであるが，たゞそれだけであつたか，どうか．2月19日には，アウクスブルクの「一般新聞」（*Allgemeine Zeitung*）に「ワーグナーと輿論」（Richard Wagner und die öffentliche Meinung）と題する無署名の記事が載つた．この記事は，ブリエンナー21番地の「船」

でのワーグナーの派手な生活を暴露し，ワーグナーの人身攻撃をしてはゞからず，王をこの浪費男から引き離すべし，と息まいた．

このやうな空気の中で，王の「不興」は，一おう，とけたものゝ，王は何かとワーグナーを避けたがつてゐるやうに思はれた．5月9日，ワーグナーは王に，「私はどうすれば，よいのですか？」とお伺ひを立てる．それへの11日の王の返事は，「とゞまりなさい．こゝにとゞまりなさい．すべては，もとのやうに，うまく行くやうになります．」

『トリスタンとイゾルデ』は，1859年夏に完成．ワーグナーは，是非，このオペラを上演したいと思ひ，各地で何度かその可能性をさぐつた．その中でも，ウィーンでは，61年8月から練習に入り，今度こそ大丈夫と思へたのに，77回の練習の後，昨年64年3月に最終的にとりやめとなつたのである．いづれの場合も，上演出来なかつた理由は，このオペラを歌ふ歌手，特にトリスタンを歌う歌手がゐなかつたからである．結局はウィーンでも，同じ理由だつた．

その『トリスタン』が，ミュンヘンで初演されることに決り，4月から練習が始まつた．今度は歌手が見つかつたのである．トリスタンはルートヴィヒ・シュノル（Ludwig Schnorr von Carolsfeld），そしてイゾルデはシュノルの妻マルヴィーナ（Malvina）である．指揮はビューローであり，ビューローにとつても，これは出世のまたとない糸口である．上演の日も，5月15日と決められた．もつとも，練習が始まつたばかりの4月10日，ビューローの妻コージマはワーグナーの娘を出産するといふ複雑な事情のもとではあつたけれども．このワーグナーの長女は，『トリスタンとイゾルデ』の稽古中に生まれたからか，イゾルデと名づけられた．

順調にすゝむかと思はれたミュンヘンでの『トリスタン』初演は，こゝで，またもや障害にぶつかる．初演予定の当日（5月15日）イゾルデ役のマルヴィーナ・シュノルが，急に声が出なくなつたといふのである．急遽，公演は延期され，実際に初演されたのは，1865年6月10日であつた．

「10月8日，プフィスターマイスターと決裂」とワーグナーは手帳のメモ

に書込んでゐるが，このあたりから，宮廷および民衆の間での空気は，ますます反ワーグナー色を強めて行く．ビューロー夫人コージマとワーグナーとの関係も，人々の噂にのぼつた．17年まへ，ルートヴィヒの祖父ルートヴィヒⅠ世は，踊り子ローラ・モンテスに熱中し，結局は，退位に追込まれた事件がある．誰もが，この不祥事を聯想して，さゝやき合つた．

そのやうな中にあつて，10月18日，またまた，人々の好奇心をそゝるやうなことが起る．まへまへから，ワーグナーは，安心して仕事が出来るやうに，さらに20万グルデンの下賜を願つてゐた．しかし，その内訳は，少しやゝこしい．4万グルデンは，すぐに現金で，残りの16万グルデンは，国の方で預つておいて投資に廻し，利子として2000グルデンづつ年4回，といふことは，年8000グルデンを支給して貰ひたい，といふのである．この申し出に対する回答が出された．それによれば，16万グルデンは不可，たゞし，利子に当たる年8000グルデン及び一時金4万グルデンは可といふ内容であつた．コージマが4万グルデンを受取りに行くと，いやがらせから，都合により半分の2万グルデンは銀貨で渡すとのことで，コージマは，やむなく馬車をやとつて，この硬貨の袋を運んだので，これがまた，ミュンヘン市民の耳目をひいた．ところが，そのやうな評判にはおかまひなく，やゝ下品な譬へではあるが，それこそ川柳にある「若殿の夜這はのッしのッしなり」の鷹揚さで，ルートヴィヒはワーグナーをホーエンシュヴァンガウに招待してゐる．11月11日から18日まで，王とワーグナーは文字通り一つ屋根の下で過ごした．しかし，これが2人の「友情」の頂点であつた．

ワーグナーがミュンヘンに戻つてみると，王宮内での，ないし，市民の間でのワーグナーに対する反感は募る一方であり，中でも，各種のジャーナリズムは，過激なことばで，ワーグナーを非難した．その1つ，「新バイエルン急報」(*Neuer Bayerischer Kurier*) は，ワーグナーを「国難の恐るべき権化」，「この報酬を貰つてゐる音楽屋」，「かつて殺人放火集団の先頭に立つて，ドレスデンの王宮を木ッ端微塵にしようとしたバリケード男」と呼び，この男が，いまや王を食ひ物にしてゐる，と激烈である．

11月26日，「民衆使者」紙(*Der Volksbote*)にも，ワーグナー攻撃の記事が載つた．それは，プフィスターマイスターと主計官ホーフマン（Julius von Hofmann）を解任しようといふ動きがあるが，さうなると，宮廷の内閣金庫から金をせしめようとする欲望が容易に満たされるからである，といふやうな内容であつた．

3日後の29日に，今度は「最新報」紙（*Neueste Nachrichten*）が，これに応へる形で，ワーグナー擁護論を載せた．この文章は無署名であつたが，ワーグナー自身の手になることは，一読誰の目にも明らかであつた．そして，「バイエルン国民の間で，少しも尊敬を受けてゐない2人，ないし，3人の人物が更迭されゝば，王とバイエルン国民とは，一挙に，このやつかいな騒動から解放されるだらう」といふところの「2人，ないし，3人」とは，即ち，プフィスターマイスター，ホーフマン，プフォルテンをさしてゐることを，人々はすぐに察してしまつたのである．

こゝまで来れば，事は決つた．プフォルテンは，12月1日，王に宛て，

> 陛下は運命的な決定の岐路にお立ちであり，忠実な国民の愛と尊敬か，それとも，リヒアルト・ワーグナーとの友情かを，お選び願はねばなりません．誠実に勤めてゐる宮廷官房の役人が，バイエルン国民から少しも尊敬されてゐない，などと公言してはゞからぬこの男は，王権の基盤であるところの国民各層から軽蔑されてをりますが，それは，民主々義的思想のためではなく，恩人や友人に対する忘恩，背信のためであり，高慢で，ふしだらな贅沢三昧と浪費のためであり，陛下の過分の寵愛を食ひ物にしてゐる厚顔無恥のためであります．

と，書いてゐる．

王権は国民の支持の上に成立つものであり，その国民全体からワーグナーは嫌はれてゐる，といふプフォルテンの説明は大へん説得的である．王に2つのうちから1つをお選び頂きたい，としながら，実は，選択肢は，はじめ

から決つてゐるのである．さらに，だめ押しまで付け加はる．12月6日，閣議は，場合によつては，総辞職も辞さない，と強い態度で，王にワーグナー追放を迫つた．同日，ルートヴィヒはプフォルテンに親書を送る．

私の決心は固い．――リヒアルト・ワーグナーはミュンヘンを去らねばならない．国民の信頼と愛とは，私にとつて，何物にも優ることを，私は忠実な国民に示したいと思ふ．

ワーグナーが，1人，ミュンヘンを離れ，スイスのジュネーヴに向つたのは，12月20日であつた．

ルートヴィヒがワーグナーに下賜した金額は，一体，総額どのくらゐになるのであらうか．大口のものは，まづ最初に，4000＋16000＝2万グルデン，64年10月に，『指環』の権利金として3万グルデン，さうして65年10月には，ワーグナーからの要求で，4万グルデンである．年俸を別にして，ざつと9万グルデン，それにミュンヘン追放までの2年分の年俸を加へれば，約10万グルデンであるが，そのほかにも，家賃も出してもらつてゐるし，こまごましたものまで計算すれば，12，3万グルデンになるであらう．

当時，局長級の官吏の年俸が，4000グルデン，高等学校の校長の給与が年2000グルデンだつたといふから，12，3万グルデンが，どれくらゐの額に相当するかは，大よそ見当がつかないでもない．つまり，本省の役職にある国家公務員の30年分，校長の60年分の俸給額に当たり，これが2年でもらつた総額であるから，1年あたりは，その2分1であり，やゝ無謀かもしれないが，現在の日本の円に換算してみれば，約3億円程度か．わが国のタレントや芸能人の多数が，やすやすと年何億もの収入を得てゐるのを考へるとき，ワーグナーの下賜された金額は，むしろ少なすぎたとさへ云へるであらう．しかし，ワーグナーはミュンヘンから追放された．バイエルン国民からの要求によつて．民衆とは，いつもさうしたものである．殺人犯バラバを放免して，イエスを十字架につけよ，と要求したのもまた，民衆ではなかつたか．

（7） 未来の君主

それでは，ワーグナーの何が，かうまでにルートヴィヒを惹きつけたのであらうか．常識的にみて，真つ先きに考へられるのは，音楽である．ワーグナーの音楽は，人を酔はせる音楽であるから，まさに打つて付けのやうにも思へる．しかし，どうもルートヴィヒは音楽をあまり理解してはゐなかつたらしい．ルートヴィヒが音楽的でなかつたことは，しばしば云はれてゐる．ピアノ教師によれば，ルートヴィヒは，シュトラウスのワルツとベートヴェンのソナタとの区別もつかなかつたさうである．なほ，2，3の証言を付け加へれば，

王の好みは不相変ワーグナーである．——王は音楽的な耳をもたないので，このワーグナー愛好は，うまく説明できない．

（傅育官デリガー　Ignaz von Dölliger）

本質的に，ルートヴィヒは音楽的ではありません．

（官房書記官アイゼンハルト夫人ルイーゼ　Luise von Kobell）

ルートヴィヒは，もともと文学に興味があり，好んでシラーやシェークスピアを読んでゐる．一般に，人見知りのはげしい子どもは，生身の人間との接触を嫌ふがゆゑに，想念の世界に遊ぶ．このやうな場合に，最もふさはしいのは，音楽でも絵画でもなく，文学である．内気な少年は，文学の中だけでは，のびのびと生きることが出来る．そこでは，いつも自分を中心に人々が動き，自分は正義の実行者でゐられる．かうして，ルートヴィヒもまた文学にのめり込み，ワーグナーの音楽ではなく，文学こそ王を惹きつけたのであつた．

音楽と文学が陛下のお楽しみでありますが，音楽については，実際，その方面の才能がおありにならず，音よりは，むしろテキストのためであります．

（オーストリア公使ブローメ伯爵 Gustav Graf Blome）

王子の若い心を，ワーグナーに夢中にさせたのは，音楽であるとは思はないでください．もちろん，音楽は王子に大へん魔的な影響を与へてはゐますが，それは決して快い影響ではありません．音楽は王子にとつて，むしろ苦痛であり，感情がまさに病的な状態にまで高まる場合も何度かありました．……作曲家が王子を征服したといふのでは決してないでせう．若い王子の夢想的な魂を虜にしたのは，それは詩人だつたのです．

（官房事務官ラインフェルダー）

王は全く非音楽的で，たゞ文学的感受性の天分をお持ちなだけです．

（ワーグナー，歌手ウンガーあて書簡，1876年）

こゝのところ通説では，ルートヴィヒが好んで逃避した神話や英雄伝説の世界を，ワーグナーのオペラが舞台の上にまざまざと出現させたことが，王にとつてのワーグナーの魅力であつた，と説明する．しかし，その解釈は，よく云はれるやうに，ルートヴィヒを「おくれて来た王」と見る先入観に，あまりにも支配され過ぎてゐるのではないか．ルートヴィヒは，おくれて来た人ではなく，逆に，「早く来過ぎた人」といつても，さう多く誤つてゐないやうにも思はれる．

ワーグナーの芸術は，未来を目ざしてゐる．それは保守的なものでは，決してなく，極めて前衛的である．ワーグナー芸術の評価は一にこの点にある．ワーグナーを最も熱烈に讃美した者の1人，ニーチェもまた，ワーゲナーを新しい芸術として評価したのである．

ルートヴィヒがワーグナーに興味をもつたそもそもの動機は，何であつた

か．子どもの時から親しんでゐた白鳥にまつはる伝説のオペラの作者であるワーグナー，それもないではなかつたが，ルートヴィヒを惹きつけた，より大きな要因は，ほかならぬ『未来の芸術作品』の著者としてのワーグナーであつたであらう．とくに「未来」といふ言葉が目にとまり，ルートヴィヒはこの本を手にとつたのであつたが，たちまちその芸術論に魅せられてしまひ，さらに『オペラとドラマ』も読んでゐる．ワーグナーの芸術論の特徴は，『未来の芸術作品』といふ題からも分るやうに，（現にある芸術についてではなく），あるべき芸術の姿についての論述である．ワーグナーにおいては，全てが，未来を向いてゐる．さうして，そこのところが，とりもなほさず，ルートヴィヒにとつては，最大の魅力だつたのである．

ドイツ帝国成立の際，ビスマルクはバイエルン国王ルートヴィヒII世を強要して，プロイセン国王をドイツ帝国の皇帝に推す旨の親書を書かした．当時，プロイセンはドイツ内での第1の強国であつたが，ドイツ諸国が合体して出来るドイツ帝国のなかで，プロイセンは何ら特別の優先権をもつてゐたわけではない．それで，ビスマルクは，第2の強国バイエルン国の国王からの推挙といふ形を考へたのである．この手紙を書くことを，はじめルートヴィヒはためらつた．ヴェルサイユでのドイツ統一のための会議にも，自分は欠席して，弟オットーを送り，最後の最後には，歯が痛い，と云つて，一寸のばしにのばしたが，一旦，書きだすと，このビスマルクが作つた草稿を，極めて念入りに，丁寧に清書したといはれてゐる．この事件は，私たちに，ルートヴィヒの性格の特質を見せてくれる．優柔不断，そして，こり性．これは芸術家によくあるタイプではないか．ルートヴィヒは，天分としては，おそらくは芸術家に最もふさはしかつたであらう．

ルートヴィヒの伝記で，誰でも知つてゐるのに，ゾフィー(Sophie Charlotte, 1847-97) との婚約とその破棄がある．これなども，ルートヴィヒの芸術家的素質を示してゐる．婚約と破棄を繰返すカフカと同じやうに，ルートヴィヒもまた，期待過剰の裏側にある幻滅に恐れをなし，前もつて尻込みして了ふのである．

ルートヴィヒの父マクシミリアンⅡ世は，王にならなかつたら，学者になつてゐたであらう，などと云はれるが，ルートヴィヒは王でなかつたならば，芸術家——それも，シラーやシェークスピアを好んだこの繊細な少年は，芸術家のうちでも，詩人になつてゐたであらう．しかし，ルートヴィヒのまへに，職業選択の自由は，ない．ルートヴィヒは，どこまでも，君主であらうと努めた．詩人に生まれついた者が王であらうとした時，この2つを宥和するものとして，ルートヴィヒが目ざしたのは，芸術による民衆の教育，その文化的向上であつた．ルーヴィヒは64年11月，ワーグナーあてに，

> 私の意図は，シェークスピア，カルデロン，ゲーテ，シラー，ベートーヴェン，モーツァルト，グルック，ヴェーバーのやうな，本当の，すぐれた作品の上演によつて，ミュンヘンの民衆を，より高尚で，より落ちついた雰囲気のなかに入れ，しだいしだいに，あの低俗で，不真面目な傾向劇から離れるやうにし，まづ他のすぐれた人々の作品を上演することで，貴下の作品の素晴らしさに対して心の準備をさせ，その理解を容易にしようといふのです．

と，書いてゐる．

ワーグナーによれば，芸術は，本来，教養を広め，人間を高尚にすべきものである．また，芸術は，「生々と描かれた宗教」であるとも云つてゐる（『未来の芸術作品』のⅣ，Ⅰ—6参照）．ルートヴィヒを強く惹きつけたのは，このやうなワーグナーの芸術観であつた．詩人の天分を授かつてゐたこの君主は，1つには，ワーグナーを通して，自分の詩作の願望を充たしてをり，もう1つには，その作品を理想の形で上演し，民衆を教育することで，君主としての努めを果したいと思つた．それで，『ニーベルングの指環』の上演のために，「大きな石づくりの劇場」を建てようとした（64年11月26日の書簡）．だから，『指環』は，ワーグナー個人の作品ではなく，ルートヴィヒとワーグナーとの2人の作品——「私たちの作品」なのである．ルートヴィヒ

は，65年8月8日のワーグナーへの手紙で，かう云つてゐる．

そして私たち2人がゐなくなつても，私たちの作品は，何世紀をも魅了する輝かしい模範として，後世に役立つでせう．さうして人々の心は，神から生まれた芸術，永遠に生きる芸術のために，感激して燃え上がるでせう．

ワーグナーに反対する人たちは，『未来の芸術作品』をもぢつて，「未来」といふ言葉を，ワーグナーへの悪口に使つてゐる．ミュンヘンで，ワーグナーが人々の非難の的となつた時，ワーグナーは政治にも介入してゐるといふ噂が流れ，ワーグナーは「未来の政治」をやらうとしてゐるとも云はれた．しかし，ワーグナーは，「未来」をプラスの方向でとらへてゐるのであるから，あへてこの言葉を使へば，ルートヴィヒは「未来の君主」と呼んでもいゝかもしれぬ．ワーグナーが永遠に未来の芸術家であるならば，ルートヴィヒは，いつまでも未来の君主でありつゞけるであらう．

注

1) お付きの人＝Gottfried von Böhm.

なほ，ルートヴィヒについての同時代の証言は R. Hacker (hrsg.): ***Ludwig* Ⅱ. *von Bayern in Augenzeugenberichten*** (dtv) と H. Barth, D. Mack, E. Voss (hrsg.): ***Wagner—Sein Leben, sein Werk und seine Zeit in zeitgenössischen Bildern und Texten***—(Universal Edition) によつた．

Ludwig II. von Bayern und R. Wagner

Yoshihiro Ito

Hier möchte ich drei Eigenarten zeigen, die mir in der Beziehung zwischen Ludwig II. von Bayern und R. Wagner wichtig scheinen.

1. Wagner war ein Freund des Königs, während der Künstler bisher in Diensten des Mäzens stand, wie z. B. F. J. Haydn und W. A. Mozart usw. Solche Freundschaft ist eine ganz neue Erscheinung.

2. Wagner bekam viel Geld huldvoll vom König geschenkt. Es soll, von der damaligen Zeit her besehen, zu viel gewesen sein. Aber vergleichen Sie es mit dem Einkommen eines heutigen Fernsehtalents! Man könnte vielleicht sagen, daß die Unterstützung durch Ludwig eher zu gering war.

3. Was erhoffte sich denn Ludwig von Wagner? Er ist nicht der Gesellschaft ausweichend in die Wagnersche Heldensagenwelt geflohen. Er wollte vor allem Wagner das Werk: *den Ring* vollenden lassen und dann das Stück zur Aufführung bringen, hatte er doch als Monarch die Absicht, Bildung durch die Kunst zu verbreiten. Ludwig II. war mehr als nur ein Träumer und hat immer an sein Volk gedacht.